

編集後記

2023年度も無事に『ミクスト・ミュージズ』を刊行することができ、嬉しく思います。今号では東谷先生の論文のほかに、博士前期課程1年の山上さんによる論文を収録しました。この論文は、彼女が昨年度音楽学コースに提出した、フロイス『日本史』に関する卒業論文をもとに新たにまとめ直したものです。また、研究報告として楽器事務室の平田さんからご寄稿いただきました。こちらは、平田さんによる「録音研究」シリーズとも呼べるもので、『ミクスト・ミュージズ』での掲載は第8号(2013年)、第13号(2018年)に続く3本目となります。さらに表紙絵には、今年度も小林英樹先生(愛知県立芸術大学名誉教授)から素敵な作品をお寄せいただきました。この場を借りて、皆様に心よりお礼申し上げます。

編集面では、博士前期課程1年の樋口さんを筆頭に、学部4年の武田さん、2年の高瀬さん、そして急遽駆り出された博士前期課程1年の山上さんが、例年に違わずタイトなスケジュールの中で作業してくださいました。編集ソフト「InDesign」の操作に加え、執筆者とのやりとり、書式の細かなチェックなど、多岐にわたる業務でしたが、献身的に作業にあたってくださったことにお礼を言います。編集委員会の風通しもよく、コロナ禍を経て学年を超えた交流が活発になりつつあることは、音楽学コース全体にとっても喜ばしいことだと思います。2024年度はコース創立30年の記念イヤーですので、この調子で音楽学コースが盛り上がって行くことを願います。(七條めぐみ)

『ミクスト・ミュージズ』の編集作業に携わるのは2回目ですが、慣れないことが多く、七條先生、前号編集長の村瀬さん、編集委員の武田さん、高瀬さん、山上さんに助けていただき、なんとか刊行することができました。ご多忙の中、原稿をお寄せくださった執筆者の皆様と、表紙絵を提供してくださった本学名誉教授の小林英樹先生に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。(樋口萌音)

今回初めて『ミクスト・ミュージズ』編集作業を担当させていただきました。歴史ある紀要の編集に携わることができて大変光栄に思います。慣れない作業が多く不安でしたが、先輩方や先生方のお力添えにより無事に終えることができました。また、ご寄稿くださった皆様にもこの場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。(武田真鈴)

初めて使う編集ソフト、何ページにも及ぶ長い研究論文など、今まで触れてこなかったものを取り扱う仕事にチャレンジでき、自分にとって大きな経験になりました。慣れない作業や、自分だけでは完了できなかった作業もありましたが、先輩方や先生方に助けられたおかげで無事に刊行まで運ぶことができたと思います。ありがとうございました。(高瀬葵生)